2022年度図書館研究奨励賞報告

図書館研究奨励賞選考委員会

図書館研究奨励賞は，1990年度から故森耕一理事長の基金によって始まり，33年目を迎えました。図書館研究奨励賞の選考対象は，機関誌『図書館界』に掲載されました過去２年間の，「論文」，「現場からの提言」，「研究ノート」で，その中から優秀作に，若手あるいは年齢に比してこれまで研究公表の機会に恵まれなかった方に差し上げています。

2022年度に対象になりますのは，2020年11月号（72巻４号）から2022年９月号（74巻３号）までです。

この賞の選考委員会は，５名で構成されています。昨年の６月に構成し，理事会の承認を得ました。今年度選考委員会メンバーは，外部選考委員として國學院大學の須永和之様にお願いしました。その結果，選考委員は，須永様のほか，監事の志保田務様，理事の嶋田学様，そして，奨励賞担当理事の常世田良と前川和子の計５名の選考となりました。

この賞は，選考委員会と会員の皆さまのご協力によって決めることになっております。昨年『図書館界』５月号に，奨励賞のご理解と会員の皆さまからの自薦，他薦をお願いし，11月号には自薦・他薦をお寄せくださるよう，12月19日（月曜日）に締切にすることを掲載しました。しかし，残念ながら本年度は，会員からのご推薦がございませんでした。

『界』掲載の，「論文」，「現場からの提言」，「研究ノート」はいずれも編集委員会の査読を通っています。その中でも図書館研究奨励賞は，若手あるいは中堅の書き手に，差し上げるものですから，**著作の「革新性」，著作にある「伸びしろ」，「ひらめき」あるいは「オリジナリティ」，「独自性」，「現場に役に立つ」**を選考基準としています。

選考事務は，次のように致しました。

今年度選考対象となるものは，『界』特集号を除き，研究歴のあるベテランの方を除き，選考時会員で無い方を除き，他の重みのある学会等の受賞者も除きました。研究歴のあるベテランの方というのは，例えば論文の最後に「謝辞」にお名前が掲載されている方や名誉教授の方です。また，ある程度の年齢で，正規の教員などの地位にいらっしゃる方などです。その結果，今年度は４本が対象作となりました。（昨年度は３本が対象作でした）

各選考委員は，2023年１月14日に，本年度対象についての評価を，研究奨励賞担当理事の２名に提出し，そのあとメール上で奨励賞に相応しいかどうかを議論致しました。

そして，２月５日の第６回理事会に選考委員会の総意を提出し，承認されました。

2022年度の奨励賞は，２件となりました。

『図書館界』74（１）に掲載されました**坂下直子氏の（論文）「大正期の学級文庫に関する一考察：奈良女子高等師範学校附属小学校を事例として」**と，『図書館界』74（３）に掲載されました**沢崎友美氏の（研究ノート）「主権者支援の場としての図書館」**に研究奨励賞を差し上げることに決定致しました。

坂下直子氏の（論文）「大正期の学級文庫に関する一考察」は，選考委員会は，全体として，丁寧に多くの資料を渉猟し綿密な文献調査を行った論文であると評価しました。文献調査の結果，奈良女子高等師範学校附属小学校の，学級文庫の実像が明確になりました。教育と分かちがたい資料群として，この論文では学級文庫を取り上げています。この学級文庫と教育方法が細やかに語られ，教育方法についての論文と言えるくらいに教育が生き生きと行われた状況が目に浮かぶようであります。

本論では，更に成城小学校の実践と対比させながら論じられる教育実践は，いわゆる探求型学習の実践史として，今日的な意義をもっていると考えられます。つまり，奈良女子高等師範学校附属小学校と成城小学校の，「読書」の捉え方や科目学習としての構成の方法を比較検討しながら，「学級文庫」を教員たちがどのように位置付け，学習実践に繋げていったかを詳しく記述されています箇所は，坂下氏の本研究テーマへの強い研究意欲を感じさせる箇所ではないかと思われます。

本稿は，大正期の学級文庫についての歴史研究として，新奇性を有するとともに，解明された「学級文庫」の活用方法や教育実践の中の学校図書館の在り方など，優れて今日的な検討課題も提起しているものとして，高く評価できると考えられます。

ただ，選考委員会では以下のような問題点も指摘されました。それは，内容面に優れた所が多いのですが，目次の上でみますと，この研究の起承転結が分かりにくい，という指摘がありました。多くの資料を渉猟し綿密な文献調査を行った論文と申し上げましたが，研究対象とする当時の実際の資料に不足感があったのでは，という不安もありました。そのため，著者も記しているとおり，当時の所蔵目録の分析が必須であろうと考えられます。そして，学級文庫と学校図書館の関連性が残された課題となったと思われるのですが，この事も今後の課題として坂下氏に更に研究を続けて頂きたいと期待するものです。

沢崎友美氏の（研究ノート）「主権者支援の場としての図書館」のテーマですが，現在において時宜にかなったテーマであると考えます。それは，沢崎氏の問題意識である「図書館は主権者をいかに支援しうるか」，主権者を支援する具体的な方法とは何か，に迫っていきます。

沢崎氏の記述は簡潔明瞭で，論点を明確に示しながら歴史的経緯を追いつつ，今日的な実践上の課題を詳らかにしていきます。本稿は，公共図書館における主権者支援の必要性とその意義についてを，主権者教育の歴史をひもときつつ，図書館における実践例について，国内外の事例を紹介し，その考察を丁寧に綴っています。

注目すべきは，主権者支援を実践する際にもっとも障壁となる課題として，著者は「図書館の中立性の在り方」を再検討する必要があるとして，「中立性」の問題を詳細に検討しています。我が国の政治属性と行政文化が図書館現場での「主権者支援」を困難にしている現状を，図書館の「政治的中立」の問題として対象化した手法は秀逸であると考えます。この問題は，過去に（1952年から）熱心に議論されました。図書館資料のバランス，量的に公平にすべきかという問いが，今までの議論では「実質的に主権者支援を抑制する理論になってしまう」ことを，著者は指摘しています。つまり，資料の選択や蔵書構成，あるいは展示や行事等の取り組みの中で，政治的中立性を，原理的に保障することは困難ではないか，という今までの評価の中で，実践されずに立ち止まっていた，これまでの公共図書館の態度を指摘しています。そして，図書館サービスにおける「政治的中立性」のあり方とは，多様な政治的立場を選ぶための材料を，利用者に提供することで，達成できるのではないかという新しい方向性を示しています。

図書館が「民主主義の砦」という機能を果たさなければ，図書館の存在意義が問われる，という指摘は重要なことだと考えます。改めてその重要性に気付かされる著作であります。著作に革新性があり，「現場に役に立つ」ものでもあると思われます。

ただ，選考委員会から，次のような指摘がありました。理論面の広範な渉猟と展開・分析，そして実践例の紹介があり，構造力がありますが，全体としては，課題の提示と研究の過程であり，何らかの結論が示されていない，という指摘であります。主権者支援として，先見的な事例の日野市立の市政図書室など，重要なものが抜けています，という指摘もありました。しかし，それらの残念な点を差し引いても意義の大きな論考であると考えます。

（2022年度，日本図書館研究会図書館研究奨励賞選考委員会：委員長・前川和子，担当理事・常世田良）